

児童・生徒の部 「特別賞」

「真っ白っていいな」

伊豆の国市立大仁小学校

4年 丹藤 優

私の名前はルナ。

ふわっふわの真っ白い毛が自まんのうさぎ。

二人の仲よしの犬達とくらしている。

一人は、名前がドック。

もう一人はチーって名前。

二人とも男の子で、とつてもやさしい。

「いやっいや。行きたくないっ！ いたいはいやなの…。歯医者いやなお！」

私は、三さいの子の様にだだをこねた。

ドックとチーが困った顔で、私を見つめる。

「ルナ、行かないと、どんどん悪くなるよ！」

「まあまあ、チー。おやつでも食べて落ちてこう。ね？ ルナもだよ！」

きつついチーの言葉と、甘いドックの言葉。

「何、もめておる。」

「あつ、おじいちゃん。来ていたの？」

私はふいっと顔をそむける。

「ルナ、いたくなるぞ。ちりょうは、いっしゅんだらう。」

それを聞いてハツとした。

（たしかにそつだ。ちりょうはいっしゅん、虫歯はずつと。何で、にげていたんだらう。）

私はちりょうからにげていた自分が、ばかりしくなってきた。

そして、おやつの準備をしているドックに向かって言った。

「ドック！ 歯医者に連れて行って。今食べ

ても、いたくておいしくないから。」

「分かった。ルナ。おじいちゃん、お願い。」

おじいちゃんの車で三分。おりるとかん板を見つけた。

『真っ白な歯でルンルン歯科』

（うん。虫歯を治してルンルン気分で、おやつを食べるんだ。ぜつたいに、ぜつたい。）

受け付けをすませて、ソファにすわる。

「ルナちゃん。四番まで来てください。」

私は診察室に入った。

大きい機かいがくつついている、長いすにすわる。

私と同じ、白うさぎの先生だ。

白衣と同じくらい毛も歯も真っ白だった。

「ルナちゃん、よろしく。私はこの院長ミミよ。虫歯があるの？ 見せてね。」

（あんまりないと、いいんだけど…。）

「2本あるわ。ちりょうしちやいましてう。」

ミミ先生が、細いドリルをキュルキュルツと回し始める。

私の顔から、冷や汗が流れる。

私は先生がドリルを置いたすきに、いすから飛びおり、走って、外へにげた。

（だめ！ こわいわ！ むりよ。チョコ食べたい。）

「あつルナ！ チー！ 追いかけるぞつ。」

（ドックは速いし、チーは長きよりとくい…。）

その時は、私の方が速かった。

道は何回も通った事があるから、家への近道も知っているし、かぎも持っている。

（ついた。チョコ、チョコ。食べるっつ！）

かぎを開けて、冷ぞう庫へ突進。

チョコをほおばった。

チョコがトロリとけ、口中に甘い香りが広がって、私の心もほどけていた。

しばらくして、ドック達が帰ってきた。

でも私はねむたくなって、ねむっていた
…。

『ルナ。お前は、チョコが好きなんだろう。
チョコと…同じにしてやるよっ!』

天から声がふってきた。

だれかと思つて辺りを見回したが、だれ
もない。

それどころではなかった。

白い毛がうす汚い茶色へと、みるみる変
わつていく。

かがみを見ると、かれた茶色の毛でおお
いつくされ歯もボロボロ。

「いやっいやっ。私は真っ白うさぎよ。こ
んな茶色、いやよ。元に…もどして!」

(はあ、はあ。夢で本っ当によかった。)

時計を見る。午後二時。

「ドック! やっぱり行くわ。真っ白うさぎ
なんだものお!」

「そうした方が、よいと思うぞ。」

おじいちゃんが、にっこり笑い、またお
くつてくれた。

「続きです。すぐよ、ルナちゃん。」

「本当にすぐ。ちりょうしてよかった!

「ルナちゃん。虫歯には七つの原因がある
の。一つ、歯みがきがうまくできない。二
つ、甘い物、間食が多い。三つ、歯の質が
弱い。四つ、虫歯菌が多い。五つ、だえき
の量が少ない。六つ、だえきの力が弱い。

七つ、つめ物のすき間。何に当てはまる?」

「二ことです。甘い物が多くて、歯みがき苦
手。」

「ルナちゃん、歯みがきを三分間がんばろ
う。」

そして、チョコ味の歯みがき粉をくれた。

「歯みがき、がんばろうっ!」

白い歯を想ぞうし、ニヤツとする。家に
つくと、チーにたのんだ。

「計つて! さっそくやるよ。お願いっ。」

(あ! 甘いチョコ味! いいねえ…)

「終わり。口ゆすいで。やるじゃん。ルナ。」

私は、その夜すぐぐうきうきしながら、
ベッドへ入った。

(うふ。みんな、歯がきれいって思うわ…)

次の日の朝、私は歯みがきをして、かが
みで歯が真っ白なのをかくにんした。

(うん、やっぱり私は歯も真っ白なうさぎ
よ。)

そして、ふわふわと軽い気持ちで、ラ
ンドセルをしまった。